

# 現代少女 の 新用語

**△落魄** おちぶれる事、落魄不遇の子など、よく用ひられる言葉である。

**△静寂** しんめりと物静かな意味で、寂として音もない、と云ふやうな、一種寂しいほどの静かさを云ふのである。

**△あこがれ** 憧憬と書く、思ひ餘つて心の落ち着かない、氣の浮くこととで、魂の身に添はぬと云つた氣分を云ふ。

あこがれの目を待ち暮らし……云々私は某雑誌の投書欄で、斯うした文句を見かけたことがある。

**△素本** そほんと読む。白文の書物、即ち註解だの、返り點などの打たれてない、本文ばかりを載せた書物

の事で、白本とも云ふ、古くからある物の名詞で、説明の必要もないやうな言葉だけれど、妙な風な處に意味を誤まつて用ひた少女があつたから、念のためにかきつけた。

**△翳** スバルと読んで、星の宿の名前である。今はもう廢刊されたけれど、つい此間まであつた文藝雑誌のスタルは、英語でも何でもない、澄み渡る大空に、小さなつゝましやかな光にまた、く七つの星がそれなので、ごちやくと一つ處に集つた様は、まるで七人の姉妹が、親しく相寄つた象である。西洋ではセブン、シスターズと呼んで居る。ずつと大昔は六星、火神なりとある。後に七つだと解つたけれど又の名を六連星とも呼びなしてゐる。

**△たごむ** 和ぐ、やはらぐなどの意味。  
あ、如何なれば斯くは運命の神の、我が上にもみつれなき、我が心悲しさ

の意。

つくり春らしい情緒になつちまふわ。』  
といふやうな場合に使う。

つまり感情の云ひ表はしに用ひられる言葉である。

**△流人** ながるれ人、遠島などのしおきを受けた者を云ふ。

あ、われは流人、故郷遠く北の國をさまじ迷ふ——たゞの少女の身でゐて斯うした文章をかゝる人がある。

**△敏感** かんばやい事で、神経過敏と同じ意味である。

**△亢奮、緊張** 亢奮は神経のたかぶること、緊張はひきしまると云つた意味。つまり神経が高まつて来て、心もちがはり切つた場合に用ふ言葉である。

**△そゝる** 揺り動かすの意義である。  
悲しい笛の音を聞いて、そゝられるやうな氣持に、思はず涙した、とそんな風に用ひる。

になごみ渡りぬ——こんな風の文章を見た事もある。一讀一寸と解釋に苦しまないでは居られない。

**△荒唐** あれすさむ事である。荒唐し切つた我が心、此頃の少女は軒んで斯うした言葉を用ひたが傾があるやうに見受けられる。だが、一寸とした事にまで、何故今の少女の心は荒唐し切るのであらうか、私は今少し真面目に、おだやかな言葉を撰んで、その時々心の状態を形容して欲しいと思ふ。

**△漂流、流離の子** 漂流は流れ漂ふ事で、流離もやはり同じ程の意味である。つまり家もなく流れ漂ふ浮世の浮浪者といふ意味に外ならぬ。少女の投書文を讀むと、何ぞと云へば、あ家もなきさすらひの、とか、母に離れて遠くわびしき流離の子われは、とか、死んど流行的に誰も彼もが使つてゐる。かよわい、年ほも行かぬ少女達

**△痛快** 非常に氣もちよく感ずる時に用ひる。斯うなれば好いと思つてゐることが、その通りになつた場合などに、「痛快だわねえ」といふ。

**△幻影** まほろし、目に見えぬ美しい影。實際ではとても見られないやうな美しいの(または不審議なもの)が、時として心に浮んで、目の前に見えるやうに思ふことがある。

**△幻滅** 美しいまほろしが、夢のさめたやうに消えてしまふこと、その時の悲しさを幻滅の悲哀といふ。

が、さうむやみやたらに漂流したり、さすらつたりするものだらうか。つまりこれはたゞ一種の誇張的文字なのである。まして滑稽なのは、富裕に育てられた嬢嬢達が、ちよいと鎌倉か逗子あたりの別荘に病を養つて居るやうな場合にまで、漂流、流離の子を振り廻してあるのがあるから堪らない。

**△敗殘** やぶれ、失敗した事。一寸入學試験に落第した場合にも、やれ敗殘零丁のなんのと、そんな風な文字を用ふのは如何かと思ふ。

**△空虚** むなしき事、中に何物もないやうな、からなどの意味。文字ばかり美しく、内容は一向空虚な文章——など、そんな風用ひられるのである。

**△情緒** 情感などに同じく、こころもちと云つた意味。  
「一雨毎に青んで来る下の堤を、斯うしてガラス戸越しに見てるとね、私す

